

地域風土について誤認識がそのまま定説になることも ～立山カルデラと急流河川を例に～

240120to

1. はじめに

最近、郷土を愛し育てることを目的とした地域の風土や文化などに関心を持たせる地域教育が盛んである。確かに、地域に居住ゆえ地域の諸々を理解するのは素晴らしいことである。しかしながら、地域教育の素材はすべて正しい事項といえるのかどうか、世の中の理解そのものにゆがみもあるのでは、とふと疑問に思うことがある。

なぜなら、専門家側から市民への事実伝達には、専門家側で十分に吟味されないうまま市民にはいつのまにか誤認識として伝わり、しかもこれが後に真実が発見されても変わらない(ことが多い)がままあるからである。加えて、地域風土には市民にとってロマンとしての捉え方はまだしも、無関心から来るのであろう些細な事としての捉える気風も確かにある。これはどんな理屈があっても好ましからざることであり、極論するともっと大きな問題(例えば歴史認識の欠落)に対し不感症になりかねないといっても過言ではなかろう。

ここでは、上記の考えのもとに、対象を地形的範疇として立山カルデラと急流河川に着目し、社会における誤認識の形成・定着と改善について検討することにした。なお、本稿は研究的エッセイとしてしたためた。

2. 問題の所在

一般に学術や史実の世界においては、地元に関する物事となると地元ひいきの解釈が定説となり、内容が意図的に改ざんされる(された)ことがままある。これは主に、学術や史実の解釈が意図的かつ我流となった結果であり、また市民が乗せられた結果、と捉えられる。

富山では、山と水と森と米が富山を特徴づけており、とりわけ立山は文化や意識の上でも格別な地位にある。それだけに、思い込みや我流的な解釈の入り込む隙は大いにありと考え、あえて「立山カルデラ」と「急流河川の常願寺川」について検討としたのである。

3. 立山カルデラは阿蘇と同じ火山性のイメージが定着

立山カルデラは北アルプス立山連峰の主峰立山の南東にある大規模な窪地のことであり、阿蘇と同じような形態であるので火山性のカルデラと何の疑いもなくいわれていた。

もともと、カルデラはなべ底という意味であり、周辺山に囲まれた広く平らになっている地形のことであることはいうまでもないが、これには火山性のものもあれば、侵食のものもある。立山カルデラはまさに後者のものである。

かつて富山大学相馬教授は現地調査により、当該地では火山性堆積物があまり

にも少ないことにより火山性ではないと結論した。当時は立山カルデラが火山性であるといわれていたことにより、相馬教授はあちこちから総スカンをくらった。

その後十数年経過して、相馬教授の指摘が次第に受け入れられ、(カルデラ展示を専門とする)立山カルデラ博物館でも学術を尊重して展示には「火山性ではない」と一言が明記されるようになった。

しかしながら、いったん一般社会にて定着した「カルデライコール火山」は覆ることなく今もまったく変わっていない。カルデラのボランティア解説員までが阿蘇のようなカルデラという表現を多用している有様である。(火山性のカルデラと言ってなくても、一般人の多くは阿蘇のような火山のカルデラと連想することになる)

市民にとっては、学術側からの正しい情報にふれることが少なく、今もなお一般社会(富山)には事実誤認がまかり通っており、正しい情報の説明努力が観光や何やらの勢力にあたかも力負けという現実が寒々として感じられてくる。すなわち、「カルデラ」イコール「阿蘇のカルデラ」ということが定着している。もっとも、市民の間には「カルデラ、何でもいい」の声も結構あるが。

4. 急流を象徴する「川ではなく滝」の発言の信ぴょう性、(2020年前)

「これは川ではなく滝である」という文言がある。これは(富山にある常願寺川の)治水事業で明治期に来日していたお抱えオランダ人技師ドレイケ氏の発言とされており、日本の河川が急流であることの比喩として世に広く知られている。

しかしながら、発言のそもそもの実像がまったくとっていいほど知られていない。ある学芸員の調査によれば、ドレイケ氏に関して現存するすべての資料の中には当該発言記録がまったくないことが分かった。いまでは立山カルデラ博物館の展示物にも事の仔細が明記されている。

ではなぜ発言が事実としてまかり通ったのか。それは、富山県の技師が砂防予算を獲得するために申請の際に誇張した表現としてドレイケ発言を捏造したといわれている。

その後、ドレイケ発言をもっともらしく解説する方が現れ、「オランダ人は平地の国ゆえに滝を見たことがないから日本の滝を見てびっくりした」と推論レベルで創作した。これについてはかなり時代が下ってから、反論が次のようになされ、現在では定説となっている。すなわち、世界的な技師である彼がヨーロッパアルプスに一度も行ったことなく、滝も見たことがないということはいえない。ドレイケ氏は常願寺川に(落差日本一の)称名滝があったということを認識していたはずである、と。

こうした経緯をみていると、予算獲得のために(一部の方のフライングとはいえ)行政は外国人技師を都合よく偏狭な技術人に仕立て上げ、しかも(一部の方の都合による)事実の捻じ曲げをいとも簡単に行い、それを一般社会に定着させ

たことが結果的にありありと伺うことが出来る。(呆れを超えて感心。) それにしても、技術者が根拠のない話を真実のように誇張することは今も昔も変わらない。例えば、ひところ(1995 兵庫県南部地震以前の話だが)一部の地震学者が「地震が起こるぞ」といいながら(研究費獲得のために国民を不安にさせて)資金獲得に奔走していた。まあ、偽装や誇張表現とは、そんなものであろう。

5. 急流河川は「常願寺川でなく早月川」、発言者は「ドレイケでなくムルデル」、(2020年)

明治期の技術者ドレイケが日本の河川の急勾配に驚いて「川ではなく滝である」との発言の信ぴょう性が長く議論の的であった(上節)。2020年に地元郷土史家(貴堂巖氏)の調査により、発言者は別の外国人(ムルデル)であり、対象河川は常願川ではなくその東隣の早月川であり、滝は落差のある滝(フォール)ではなく段々状の河床が連続した小さな滝(カスケード)であるという事実が判明した。

これが7月に土木史分野で公表され、関係者の間では激震が走った。一般においても、早速、地元の「北日本新聞」では20年6月にでかでかと一面掲載を含め二回も掲載された。しかしながら、一般には「川ではなく滝」発言の真実が少しも定着しなかった。

また、20年11月には滑川市の市報(全戸配布)には、トップ記事として「ドレイケ発言の真実」が解説を交えて掲載された。市長が土木系出身のこともあって、滑川市のシンボル早月川のことだけに、市側は市民にPRした。しかしながら、市民にとって市報がもともと縁遠いだけに、市内や県内の専門家の間でも話題に上ることはほとんどなかった(元市役所教育系建設系職員談)。

それから3年後に関連する専門家の勉強会が貴堂氏をお招きして開催されたが、そんなこと知らないといった専門家が実に多かった。これには貴堂先生もびっくりされていた。ご自身の説は発表当時にはマスコミでも定説を覆す新説(新発見)ともてはやしたにもかかわらず、一般への浸透は望むべきもなかった。

そして今も、県や国の関連するHPには、ドレイケ発言の塗り替えはなく(機運すらない)、これまでの何も変わってはいない。なぜ変えねばならないの(だんまり)といわんばかりであるようにみえる。これも、明治期に発言の真実が歪曲されたことを考えれば、さもありなんといい所である。なお、歪曲の理由としてあえて挙げれば、発言者が無名のムンデルよりも著名なドレイケがいいとか、二級河川の早月川より一級河川の常願寺川の方がいいとか、常願寺川では大規模砂防工事継続中の知名度抜群河川であるとかを勘案したのではと思える。

6. 事実誤認を認めない風潮

カルデラ認識とドレイケ発言について、残念なことに今でも教育や事業の方々(注)が講演会やシンポにて「カルデラは火山。常願寺川は滝そのもの」といって一般人を教育し、しかも各種コミュニケーション紙にでも堂々と主張する有様である。事実や真実を世に伝える気概が湧いてこなくても、せめて自分から正しいことを

正しいと認識くらいの気構えは持って欲しいものである。

以上のように述べてみると、専門家が罪作りはかなり加担しているといえる。間違っただけを間違いとは認めず、一般の方に(間違いを)教育しようとは、良識を疑うばかりである。なかには、事実事実というよりも却ってロマンがあつていいじゃないかという人もいる。科学技術に生きる人間が、間違っただけをロマンというのも片腹痛い。科学や技術のロマンとは、(歴史の分野も含めて)人間の夢をかなえる努力の総称といえるものであるのに。(なお、良識ある専門家も多いことを付記しておく)

7. まとめ

一般における事の認識としては、無名よりは著名、小事よりも大事、貧層よりも見栄え、といったことが先行しがちである。だからこそ、専門家の事に対する仔細を十分検討しておくことが要求される。検討不十分ならば市民側に向けての当然誤認識へとつながり、これが定着すると覆すことは困難といえる。それだけに、専門家の不断の努力は条理でなければならぬし、学術的事実が市民層に伝わるよう、市民層の眼力を健全化しておくことも必要かと思う。

また、学術関連の市民への伝達については、専門家が市民とどう向き合っているかという本質論を基調にした報道をマスコミには(今以上に)期待したい。

以上、誤認識問題の背景には専門家と市民との意思疎通の問題があることをみた。改善には市民主体での両者の緊密な関係を社会全体で(今以上に)構築していくことになるかと思う。

8. 謝辞

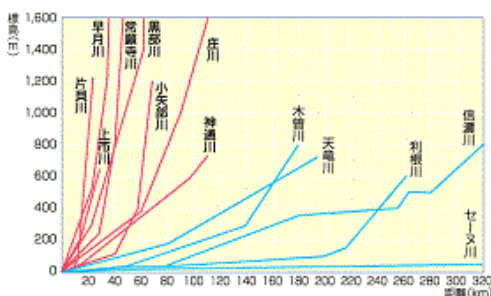
本稿は関連する多くの専門各位への聞き取り取材に基づいている。古くは1990年代の富山大某研究室研究会や2020年代以降では富山の大学と民間の合同研究会においても多くの方々と議論した。関係各位に厚く謝意を表す。

参考1； 史跡認定(余談として) 本稿のような話は歴史の分野でも歴史認識のねじ曲げを含めてまったく同じようにみられる。特に郷土にある歴史的な史跡を含めた歴史文化財の史実認定については、史実が伝承によりゆがめられことが多々ある。もちろん伝承そのものには史実でないにしても長く伝わったという事実は認めるが。

参考2； 市民の声(著者周辺) 13年10月にドレイケ問題を一般市民や建設系人に投げかける。「まったくの虚偽である可能性もありますが、ドレイケさんご本人がジョーク混じりに「まるで滝ですよ」というような会話をしていたのかもしれませんが。」そうかあ、偽装話なのに。「ロマンはロマンで」楽しみたいとの返答が多かった。

参考3； カルデラと急流河川

常願寺川の総延長 56km、早月川は 27km、標高差は共に 3000m



左図
急流河川河床断面
図、富山県 HP より

右図
立山カルデラ全景、立
山カルデラ砂防博物館
HP より

